

東京清陵会だより

われら霧の子孫たち 団塊のあたりの様子

今回の編集担当70回生は、新田次郎の小説『霧の子孫たち』をキーワードに、特集を「われら霧の子孫たち」として企画した。

有料観光道路ビーナスラインの霧ヶ峰延伸反対運動が起こったのは、我々

70回生が卒業した翌年の一九六八年。

東京で故郷の自然が危機に直面していることを知った新田次郎は、この反対運動に取材し、自然保護を真正面から描いた作品を発表した。この小説を書いた新田次郎をはじめ、モデルとなっ



新田次郎（一九二〇、本名、藤原寛人、31回）は、諏訪市角間新田に生まれ育ち、諏訪中学に学んだのち上京。気象庁勤務を経て作家活動に入り直木賞等を受賞する。故郷の山河が危機にあることを知り一冊の小説を書いた。『霧の子孫たち』は「文藝春秋」一九七〇年四月号〜一〇月号に連載され、十一月に単行本として刊行された（写真は初版本表紙）。

第14号

編集・発行人
東京清陵会

（諏訪清陵高等学校同窓会）
東京支部

会長 林 尚孝

事務局 〒120-0005

足立区綾瀬 2-31-7

（株）小野包装 気付

TEL 03-5680-7633

FAX 03-5680-7665

E-mail: tseiry@papiacargo.co.jp

た主要登場人物は、いずれも清陵の大先輩。

反対運動の先頭に立った産婦人科医・青山銀河は、青木産婦人科病院院長・青木正博氏。「おれは産科婦人科医になったことを内心誇りに思っている。おれの手によって新しい生命が生まれるのだ。生命は大事にしなければならぬ。絶対守らなければならぬ」と生命を断絶する者への怒りから情熱的に活動する。

考古学者・宮森栄之助は、「けもの道」等多数の著書のある在野の考古学者・藤森栄一氏。このふたりは諏訪中学の同級生だった。

もうひとり、霧ヶ峰の植生を黙々と観察・保護・研究している清水丘高校の教諭・牛島春雄として登場しているのは、我々が生物・地学を学んだ「うしまさ」こと牛山正雄先生。「人間があつてこそ自然があるという人間中心主義の考え方は、人間以外の生物の生命を軽視する考えに直結します。自然の中に人間があるのです。人間がいき

る権利があると同じように、自然も生きる権利があるのです。人間以外の生命を愛する気持ちがあつてこそ人間愛を口にする事ができるのだと思います」と語るなど、この小説のキーパーソンの存在で登場している。

この反対運動は、「南側大迂回路線」という譲歩を引き出したものの、建設阻止は出来なかった。たとえ迂回させたとしても道路を造らせてしまった敗北感に打ちひしがれる青山銀河に対し、新田次郎は青山の妻ゆきの口を借りこつ言わせている。

「結果を勝ったとか負けたとか単純に考えないで、むしろ、ほんとうの戦いは将来にあるのだと考えたらいかがでしょうか」「霧の子孫たちがやらねばならない仕事はいっぱいあるでしょう。諏訪湖を生き返らせること、諏訪の澄んだ空気を工場の煙でよごされないようにすること、そうね、諏訪だけのことはいいわ、長野県全体、日本全体の霧の子孫たちが手をつないで、自然を守る運動を起こさないと日本の自然はほんとうに滅びてしまうかもしれないわね」

この小説全体を貫いているトーン、この言葉の中に、意識するしないにかかわらず、我々が3年間の清陵生活で培われた清陵精神「自反而縮雖千萬人吾往矣」が流れており、それは紛れもなく「霧の子孫たち」精神なのだと思う。

以下、「われら霧の子孫たち」をキーワードに原稿を寄せてもらった。

2003年度

東京清陵会定期総会案内

日時 平成15年10月17日(金)午後6時～午後8時30分
(午後5時から受付開始)

場所 アルカディア市ヶ谷(私学会館)3F「富士の間」
東京都千代田区九段北4-2-25 Tel 03-3261-9921
市ヶ谷駅(JR、地下鉄有楽町線、南北線、都営新宿線)下車 徒歩2分

議題 ①2002年度会務報告、決算報告
②2003年度事業計画、予算案

③副会長人事について
④その他

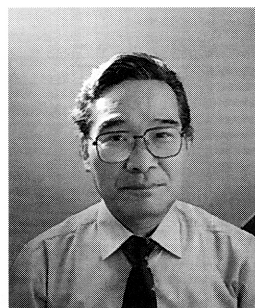
懇親会 会費 8000円(在学中の学生は半額)
*当番幹事 70回生、次期当番 71回生、サブ幹事 80回生、90回生。

ご面倒ですが出席、欠席いずれの場合でも同封の返信用葉書にご記入の上、9月30日必着にてご返送ください。

『霧の子孫たち』その後

「脱ダム宣言」に至る歩み

飯田 隆夫 (70回 歯科医師)



ビーナスライン建設反対運動で中心になって活動してきた青木正博、藤森栄一、牛山正雄氏等が他界後しばらく間をおくことになるが霧の子孫たちが再び活躍することになった。そして先輩諸氏の運動の教訓を学びそれ以上の実績をあげることができたことに長年これらの運動に係ってきた私としては誇りに思う。田中康夫長野県知事の脱ダム宣言で下諏訪ダム中止は全国的に有名になったが、それ以外でも輝かしい実績をあげていることを評価していただきたい。簡単ではあるが下諏訪ダム中止にたどりつくまでの経緯を説明してみたいと思う。

そもそも自然保護運動とは何かである。非常に幅広いもので一概に定義することは難しいが、開発反対という分野に関して私の主観を述べてみたい。自然保護運動とは決してロマンチックなものではない。むしろ政治闘争とい

う概念が近いかもしれない。簡単にいえば価値観の違いからの戦いであり、仮に反対運動で負けても命を失うことは無いかもしれないがそれは価値観と利害の対立であり政治そのものである。特に開発で潤う人々からみれば我々の存在は敵そのものである。開発反対に参加することにより生活基盤を失うことさえ考えられる。事実仕事に差し障りとしてこの運動から去っていった人がいるのも事実である。では何故そこまでして開発反対運動をおこなうのか。それはやはり子孫に対しての責任ということになるのではないか。

私も諏訪の地を一六年以上離れていたが、以前からの風景がいとも簡単に破壊されていくのを見かねてこの運動に参加する決意をした。

* * *

霧の子孫たちの復活は丁度バブル経済がまさに始まろうとしていた平成元年霧ヶ峰地籍の上桑原財産区所有の原野に東京の不動産会社MDIが計画したゴルフ場計画(スイス村)反対運動を機に始まった。その中心になったのは清陵四八回生で長年損害保険会社に勤務していたが定年後ふると諏訪に帰ってきた塩原俊氏を会長に以前ビーナスラインの反対運動で活躍したメン

バーとその後この運動を知り新たに加わったいわば新参者で環境会議・諏訪(以下当会)という名称でゴルフ場反対運動を始めることになった。だがこの反対運動を続けている間にも次々新たな開発が持ち上がりそれらを総て引き受けることになってしまった。MDIの計画はバブル経済の破綻で自然消滅することになったがそれ以外で直接係ったものでは、

(1) 大建工業の霧ヶ峰池のクルミ(踊り場湿原)隣接地の別荘地開発

青木氏健在の頃反対運動をおこない一時凍結されていたがバブル経済で計画が復活した。すでに県から開発許可がとってあり阻止することはできなかったが、数年前に別荘地販売をはじめたもののほとんど売れていないようだ。

(2) 下諏訪町の第三セクターが計画したまないた平のゴルフ場計画

この運動をきっかけに下諏訪町の外科医武井秀夫氏(清陵五〇回生)が運動に加わり『超人的活躍』で数ヶ月のうちに町長に開発断念を表明させた。のち下諏訪ダム反対で活躍した。

(3) 鴻池組、近鉄不動産が霧ヶ峰車山南面のカシガリ山で計画したスキー場、別荘地開発計画

以前からツキノワグマの生息する諏訪地方で貴重な落葉広葉樹林として知られていたが、大規模に破壊されることによりツキノワグマの消滅を防ぐため反対運動をおこない、オオカミの営巣を開発予定地隣接地で発見し開発を

阻止できた。このとき当会の反対運動に理解を示し協力したのは長野県環境自然保護課であった。

(4) 長谷工コーポレーション(以下長谷工)が計画した奥蓼科リゾー

ト開発

茅野市笹原にゴルフ場、別荘地、スキー場を計画した。別荘地は法的手続きに問題なく県の許可を得た。しかし当会が申し入れたことなのだが御射鹿池(みさかいけ)後背部に計画されたスキー場は東山魁夷の名画のモデルになったことを理由に開発許可を出せないといふ環境自然保護課が「言いがか

り」をつけ実質不許可にし、ゴルフ場開発ではゴルフ場総量規制という長野県の方針を変えることはできないとの理由でやはり不許可とするなど県環境自然保護課が主導権を握り知らぬ間に阻止することができたというのは実感であった。別荘開発は許可がおりたものの長谷工が倒産寸前で着工の見込みがなく実質中止になっている。

(5) 県営蓼科ダム反対運動 上記の

長谷工のリゾート開発の調整池を兼ねる治水ダム。

ダム下流芹ヶ沢の住民が反対運動に加わり「蓼科ダムを考える会」を設立。立ち木トラスをおこない建設着工を阻止した。会代表の柿沢勝一氏が長野県会議員選挙に茅野市選挙区からダム反対を公約にして立候補するが落選した。平成15年正式に建設中止が決まった。

*茅野市では環境会議・諏訪の名では知名度が低く地元民の反対運動であることを示す意味であえて蓼科ダムを考える会という名称を用いた。この手法は下諏訪ダムでも同様である。

(6) 県営下諏訪ダム反対運動

最初、下諏訪在住の増沢勝氏を中心となり細々と反対のビラを配布していたがダム建設が本決まりになり下諏訪ダム反対連絡協議会を武井秀夫氏を代表に設立した。署名運動を大規模におこない県に建設中止を請願するが却下されると建設差止めの裁判をおこなすが田中康夫知事の脱ダム宣言により訴訟取り下げになった。ダム建設中止のため田中康夫氏に期待して平成一二、一四年の長野県知事選挙では勝手連諏訪の中核として当選には大きく貢献した。

詳細は武井秀夫著『脱ダム讃歌 川辺書林』を読んでください。私(飯田隆夫)は高田靖夫という名で登場します。

それ以外では諏訪湖浄化問題、立ち木伐採阻止ツキノワグマ保護運動を現在もおこない反対だけでなく行政に協力することも積極的に行っている。



下諏訪ダム予定地を視察する田中知事(中央)、右端は筆者。

総括

青木正博氏が活躍した時代とは時代背景が変わり霧の子孫の活躍が従来の自然保護という概念より政治運動に变身したというほうが正しいだろう。

以前の運動方針を知らないのが比較することは難しいかもしれないが環境会議・諏訪の運動方針の特徴を列挙すると

(1) マスコミをあまり利用しない。
テレビ、新聞に対する不信感があつたことは事実であるが信濃毎日新聞以外ほとんど取材に來なかつた。一時的にマスコミで報道されても世論がそれほど変わらないことは長い運動で実感していた。

(2) 有名人の利用をほとんどしなかつた。

著名人の名を連ねて運動の広がりを示す方法を一度おこなったことはあるがそれで世論が動くことはない。カンパもせず名前を貸してやるんだという不遜な輩と付き合いたくないという気があつた。決して強気でなく本気でそう思っていた。

(3) 学者、研究者を信用しなかつた。

た。

学者という人種は信用できないという気持ちがあつた。例えば長野市で計画されていた浅川ダムで最初反対していた信州大学の地質学の教授は突然推進派に変わった例がある。こちらの都合よい論文があればそれを適時利用すればよいとの気概があつた。

(4) 役人とうまくつきあつた。

むしろこちらが利用されたというのが正しいかもしれない。リゾート開発阻止では長野県環境自然保護課の考えとほとんど変わらなかつた。むしろ彼らのほうが過激でさえあつた。

(5) 資金面は自腹を切るのは当然で

あつた。

結果的には主要メンバーが経済的に恵まれているということになるが資金集めのコンサートをやったこともあるが多くて収益が少なく何のためのイベントかわからなくなつてしまった。主要メンバーは皆かなりの出費をしている。

運動を楽しむ気持ちがなければ十年以上運動を続けることはできない。

(6) 政治活動を決して否定しない。

ただし特定の政党との関与には慎重であつた。長野県知事選挙では諏訪地方の運動の中核になつた。

(7) 法律、専門的知識を徹底して勉強した。

強した。

理念だけでは勝つことはできない。開発推進の専門家と対等に論陣を張るなければ勝ち目がない。

必要ならば講師を招いて勉強会を何回もおこなつた。各地でおこなわれるシンポジウムに積極的に参加した。特に下諏訪ダムで基本高水論争では県土木部も反論できなかった。

平成大不況で霧の子孫たちの活躍の場が少なくなつてきたのは現実であるがこれからも郷土諏訪の破壊を阻止し、美しいふるさとを守る使命を果たしていきたいと思う。そして次の世代にも引き継がせていきたいと思う。

回復には膨大な時間がかかること――

そんな話を牛正の授業中聞いたような気もするのだが、ボクの中ではビーナスライン延伸問題とは結びつかない。中庭でテニスに興ずる牛正を窓越しに見ては、のんびりした先生だと思つたし、霧ヶ峰での環境保護に闘い、高校漕艇界の重鎮として走り回つていたことなど知る由もなかつたからだ。

環境問題を研究テーマとして取り扱う研究者は、ボクの周囲にもたくさんいるが、何かこう本質は違ふところにあるような気がズーっとしてきた。ダイオキシンを安全に分解する技術や、地下にしみ込んだ有機溶剤の回収技術、絶滅危惧動物の保護運動など……それはそれで大事だし、確かに役に立つのだけれど、環境問題を引き起こした元凶には迫っていない――と直感するのだ。ボクが地球の歴史をやつてきたせいかもしれないが、自然の成り立ちを知らなければ、よくぞ今を生きている！ いや、生かしてもらつていいると痛感することが多い。生きるために必要なありとあらゆるものが、人間のライフサイクルを遥かに超える時間の蓄積の上に成り立ってきたことを、きちんと伝えるべきでは？

――と思うのである。明日のことを考えない、子や孫の世界を考えない、今一瞬の便利さと快樂だけにおぼれていく人生。ボクが「一世代経済主義」と呼ぶところの生き方こそが元凶ではないのか？ 未来の子供達のために、喜んでわずかな我慢をすることができる自分。本当の幸せは、そういうところ

原点は清陵時代の牛正の研究室

――自然があつて、我々の今がある

原山智 (74回 信州大学教授)

「霧の子孫たち」の描かれた昭和43―44年のちょうどその頃、ボクらは清陵に在籍していた。大学紛争が最も激しくなろうとしていた時であつたし、清陵にもその余波が及んでやや騒然とした時期もあつた。皆先行きに不安を覚えていたのだらうか？ ともかくよく勉強した学年だつたと思う。それだけが、真剣に何かを求めている。

牛正には1年の時、地学を習った。

テクニカルチームは英語で板書されるのが常で、あとから思い返してもその授業はアカデミックな雰囲気満ち満ちていた。大学でもあそこまでの高揚

感を覚えた授業は数少なかったように思う。あれは、知識の伝達とかいった範疇を完全に超え、熱意というか人格が心に響いていたせいなのだろう。実際授業で取り扱った内容は、悔しいことに断片的にしか思い出せないが、その時感動したことだけは今でも余韻となつて響き続けている。そんな教師には滅多になれない。私の中の生涯の目標である。

清陵に入学して最初の地学の授業があつた直後だと思ふ。ボクは、地質の分野に進路を定めようと思つていて。実は、小学生以来の石大好き少年

ではあつたものの、それはあくまで趣味というオタクの世界であつて、自分の生涯の仕事として強く意識しだしたのは牛正に会つてからであつた。當時、地研(牛正の地学研究室)にはいろんな生徒が寄りついていて、入学早々の一年生には何とも入りにくい雰囲気があつたのだが、ボクは意を決して入つていった。牛正に宣言しない、なんだか決意が揺らいでしまうような気がしたのだ。「先生、ボクは地質の学者になりたい！」ボクは相当興奮していたし、牛正がどう対応してくれたのか記憶にない。随分と鼻の柱の強いやつだと思われたかもしれないが、本当はドキドキものだった。今に思えば、まったく冷や汗ものである。しかし、それがその後の原点の一つになつたことも間違いない。

高山における植生が破壊されると、

2003東京清陵会第14号特集

われら
霧の子孫たち

にある——そんなメッセージを託せる仕事だ、したいと思う。それが、新田次郎が、牛正が訴えたことに通じていくと信じている。

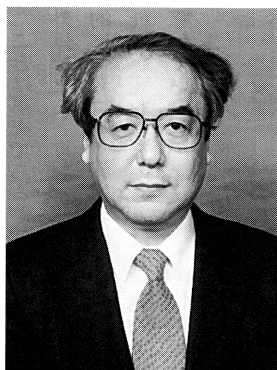
最近、多くの方々の協力を得て、山と溪谷社からの単行本「超火山―槍・穂高」を出版した。同級生のライター山本明が共著者になってくれたおかげで、北アルプスの成り立ちについての30年来的成果をすこしはわかりやすい形で、提供できたと思う。牛正には一

番最初に報告しなかった。生き方を教えてくれた牛正にせめてもの恩返しをしたいと思うが、生きていけば「まだまだ」と言うだろう。この本では自然の背後には壮大な時間と誕生のドラマが秘められていることを述べているのだが——伝えたかった本当のこと、それはそうした自然があつて初めて我々の人生の今が有ることなのである。われら霧の子孫なり！と胸を張れる生き方をしていきたいと思う。

精神科医療へ突き動かしたもの

——己への“こだわり”と“意地”

斎藤万比古 (70回 国立国府台病院精神科医)



くようにという課題をいただき、正直なところ荷が限りなく重く思った次第です。

新田次郎作「霧の子孫たち」はずいぶん以前に読んでいました。もちろんこれが牛山先生をはじめ清陵の恩師、諸先輩の描きこまれた作品であることは承知していましたし、その後の長野県による自然の切り売りの観光行政のスタートラインとも言えるビーナスライン建設の乱暴さを静かに、とてつもなく静かに描き上げた書として共感も感じていました。今回、自分の生き方を「霧の子孫たち」という切り口で描

ることを否定できません。

私は現在、国立精神・神経センター精神保健研究所国府台病院に勤務している児童精神科医ですが、もし私がいくぶんの己へのこだわりという「意地」を持っていたとしたら、それは児童精神科医になったというところでしようか。もちろん高校時代に心理学研究部というカルトなサークルに所属したことの意地という意味もいくぶんはありますが、それ以上に精神科医が自分の感性に合っていないかもしれない、強い不安とともに心底迷った医学生時代の自己決定に際して私を突き動かした闇雲な意地でした。こんな微力な自分でも精神科医になれば、精神科医療はそれだけ多くの精神科医が背負うことになる。そのことでこのどこか暗い精神科医療(当時の精神科医療は改革運動の最中にある旧態然とした収容所精神病院がほとんどでした)のユーザーが、一般医療並みの高度な医療サービスを受けられるような時代に近づけることになるかもしれないと考えたように思います。当時の精神科医療の重い停滞した空気と、精神科医療改革運動の高い理想と混乱に圧倒されながら、居ても立ってもいられないという思いの選択でした。

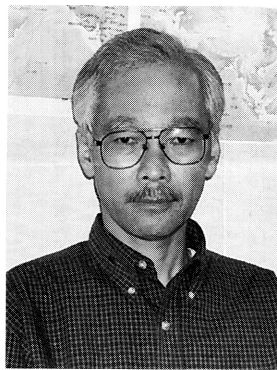
そしてさらにそれから5年後、もう一度このなんとも説明の難しい「意地」と出会うことになりました。精神科医として民間精神病院で仕事をしていた私に国立国府台病院児童精神科医のポストにつかないかという誘いを受けたときのことです。昭和54年当

時、精神科領域の中で児童精神医学のマイナーさは際立っていました。まぎれもなく、まだ男で児童精神科医になるのは変わり者という時代でした。なぜか私はむきになって自分が児童精神科医にならなくて誰がやると力みかえっていました。現在のように児童精神医学が社会的注目を集めることになるとは誰も予想しなかった時代です。

諏訪湖から大海原へ

——地球規模の海洋汚染観測と研究

功刀正行 (69回 国立環境研究所)



る。

「あ、またやっちゃった」。目の前を薄黄緑の水が流れてゆく。

子供の頃家から数分の距離だった諏訪湖に良く遊びに行った。当時の湖畔には、丸太が打ち込んであり、その上に乗ってよく遊んだが、丸太は腐食しているだけでなく苔などでぬるぬるしており滑りやすく、何度と無く落ちた。この時は、続けて2度落ち、なぜか落ちてゆくときに見た太陽光の注ぐ湖水の薄黄緑色が脳裏に焼き付いている。これがいわゆるアオコとよばれる緑藻の繁殖のためであることは知る由も無かった。

その後、清陵の諸先生から薫陶を受け、三沢基金で研究費なるものをいただき、形ばりの報告書を書いた。まさか、研究予算獲得に苦しみ、ますます形ばかりの報告書に追われる生活が

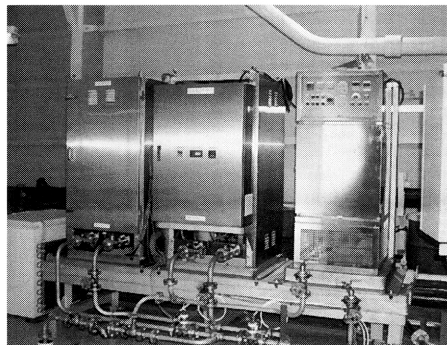
2003東京清陵会第14号特集

われら
霧の子孫たち

待っているとは思ひもしなかった。将来はエレクトロニクス関連の仕事に従事するつもりであったが、どこかで脇にそれ、大学、職場共に二つずつ経験した後に、幸いにも創立間もない環境庁国立公害研究所(現独立行政法人国立環境研究所)に入ることが出来た。

いつの間にか研究所での在籍は25年を過ぎてしまった。協調性に乏しい私(清陵風に言えば、自反而縮雖千萬人吾往矣)は、対象を大気から海洋へと代え、今は有害化学物質による海洋汚染を地球規模で観測する研究を行っている。我々が使用した農業や化学物質の内のある種の分解しにくい物質は、様々なルートを経て地球全域に拡散し、思わぬところで被害を及ぼすことが知られている。例えば、北極圏に棲むシロクマやアザラシの体内にはこうした人為起源の有機汚染物質が高濃度に蓄積されていることが報告されている。近くにはこれらの物質を使用されたり廃棄された場所がないにもかかわらずである。これらの物質は大気や海水の動きに乗り遠距離まで運ばれる。しかしながら、途中の輸送・拡散過程

の観測例は少なくその実態は明らかでない。そこで、我々は有害化学物質を地球規模で観測するために商船(主として貨物船)に観測機材を搭載させていただく方法の検討を開始した。こうした観測船のことを篤志観測船と言いが、今までは船上で測った気象データを提供や小型センサーの投入などが主で、我々が考えているような大規模なものとはほとんどなかった。



石炭運搬船に搭載した海洋汚染観測装置

一九九九年六月に東京地方に在住の69回生が集まる会があった。同席した津金正典君に私の仕事の話をして広汎な船舶の利用がキーであることを伝えた。彼も海運会社として環境問題に寄与することがないかと考えておられたこともあり、すぐに会社で奔走してくれた。お陰で、翌7月には商船利用に関する大枠の合意が取れた。後は、予算化であったが、これも想像以上に高い評価をいただき、即二〇〇〇年度からプロジェクトを開始することが出来、現在までに日本―ペルシャ湾間と

日本―豪州間を航行する貨物船で海洋汚染観測を実施した。井の中の蛙の私にとつてまさに大海の船旅はスケール間を一举に広げてくれた。幸い本二〇〇三年度からも継続して予算を確保でき、日本―北米間でも観測を開始する予定である。あの席で津金君に会わなかったら、この仕事はまだ始まっていなかったに違いない。

自然を相手にしていると、その巧み

海洋の環境保全に向けて

——ビジネスの現場からの協力



津金正典(69回 日本郵船)

さに畏怖の念を抱かざるを得ない。自然の大切さ、人間の関与の難しさを、十分理解できない我々に飽くことなく説かれていた牛山先生をはじめとする諸先生の思いにやっと触れることが出来る様になったのであろう。今拙い授業をさせていただいているが、次の霧の子孫たちへ幾ばくか思いを伝えることが出来れば、諸先生へのわずかながりの恩返しになるのかと思う。

清水ヶ丘では剣道に明け暮れ、「霧の子孫」とはとても口にするような者ではありません。以下のような経緯から、海の美しさを保全したいという気持ちでいざというところで霧の子孫の端くれにでも連ねられたらと思っている次第です。

幼い頃に憧れた海と帆船に誘われ、船員の道を目指し東京商船大学に入学しました。江東区の越中島にある学生寮に入寮して驚いたのは、夜な夜な鼻をつく隅田川の匂いで寝つかれないこ

ととカッター訓練で漕ぎ出す隅田川の水の汚さでした。心には漕ぐや天龍・富士・守屋の気概はありましたが、なんと汚い隅田の水には閉口しました。思えば東京オリンピックの1年半後のこと、高度成長の中で環境保全への取り組みは遅れていたのでしょうか。信州の空気で育った小生には初端から大ショックでした。明治時代の大先輩は、隅田の水はロンドンのテムズの水につながるという海外への雄飛を膨らませたと聞かされましたが、テムズの水はどんな環境にあるのか心配になってしまった記憶があります。

その後、帆船「日本丸」(現在は横浜港に係留している一世)による卒業航海では幸運にもオーストラリアのクック船長上陸二〇〇年祭に招待されフイジー・オーストラリア・ニューカレドニアを巡る南太平洋の帆走航海を経験することができました。サンゴ礁に囲まれた南の島々は映画「南太平洋」の世界そのものでした。また、寮歌に歌われていた「マストに唸る風の音、船舷叩く浪の音、夜毎の夢は故郷の、野を将山を巡れども、身は今此処に南洋や、遠くも来る船路かな」の思いを実感しました。この航海を通じて信州の山水や空気のように日本の海も美しくあってほしいという意識が芽生えたことは事実です。

船会社に入社し航海士・船長としていろんな海を航海しましたが、環境保全問題を強烈に印象付けられたのは入社直後、アメリカ・カナダにまたがる五大湖航路に就航した折のことです。当時、同湖内ではすでに水質保全の観点から船舶の汚水(生活用水)の排出が禁止されていたので内地で特別の貯蔵タンクを船内に増設する工事をドックで施工することになりました。セントローレンス河を遡行し、ウェランド運河(ナイアガラ滝の高さを上下する運河)を抜け、やっと五大湖に入ることでできましたが、やはり湖内の港湾の水はきれいなものでした。もっとも湖といっても諏訪湖と違いミシガン湖などは海とも思える広さでスケールが違います。ミシガン湖畔の木々にリズが遊んでいたのも忘れない光景で

す。とにかく環境に対する姿勢がかなり違うことを認識しました。

現在では、世界的に海洋保全が叫ばれ海洋汚染防止条約が発効し各国・各船会社で対策に取り組んでいます。日本では日本海の日ホトカ号沈没による北陸海岸への油の漂着、東京湾のダイヤモンドグレース号座礁による油流出事故の記憶があると思いますが海洋環境保全には、船舶の設備改善と適切な運航が重要かつ不可欠です。最近、わが国の沿岸で多発している外国籍船の海難事故は由々しき問題と捉えてもらいたいものです。

十数年前から、陸上勤務に転じ船社(船舶運航者)からみた港湾設計の仕事をするようになりました。日本に輸出する鉱石・石炭・チップの外国積出し港湾や日本の石炭・LNG火力発電所受入れ港湾等の設計アドバイスをするため内外各地の新規建設港湾現場に赴く機会が増えました。しかし、何処でもきれいな海を埋立て護岸や棧橋を築造し、接近水域を浚渫して航路や泊地を設定し、海岸の森林を伐採して輸送経路を建設する自然破壊を目の当たりにし忸怩たる思いがぬぐえませんでした。陸上輸送のルートを確保し、より経済性のある大型船を入港させるためにはやむを得ないのですが、港湾設計にあたっては基本的に海象・気象といった自然をうまく利用して水域の有効活用を図り、漁業従事者との融和を視点に置くことで自分の気持ちを和らげることに努めて来ました。

そんな折、69回生の同期会で国立環

境研究所の功刀さんの話を聞き、船会社として海洋の環境保全に協力する必要があることを痛感しました。陸上に散布された農薬が海洋に影響を及ぼしているという感覚は、我々船員にはほとんどなく、また、気象観測以外でそのような調査に協力した記憶も有りませんでした。身近の環境問題としては、日本の港湾で石炭船や鉱石船等に積み込まれるバラスト水(貨物が揚がった後、プロペラを洗めるために必要なおもりとなる海水)が豪州で積荷時に排出され港湾の水質を汚染するとい

転校先で実践した「清陵精神」

——生徒会長になり校則を変える



これは若気の至り? それとも無知の極まり?

私は、二年生の夏までの「期間限定」の「清陵生」であつたが、幸運なことに「清陵OB」としての資格をいただき今こうして寄稿する榮譽に浴している。山国にありがちな閉鎖的なイメージとは程遠い「去る者も追う度量の大きな清陵諸氏」にまた一段と魅了

った問題があるだけでした。経済性の事情から日本籍船舶の隻数が減少し日本人船員の乗船できる船舶が減少する中で、幸いにも海洋をビジネスの場とする船社の社会的責任を果たすべきであるとする会社の姿勢のもとで、海の環境保全は自ら行なわなければならないとする現場の船員の協力を得ることができ功刀さんの海洋水モニター調査が開始されました。

本研究が、さらに成果を挙げられるよう今後も協力して行く所存です。

浜 敬三(70回 三菱電機)

させられている次第。読者諸兄は、この便りに懐古調を期待しておられると独断し、「清陵生番外編」の経験談を披露させて頂きたいと思う。

私の転校先は、上野から約三十分の距離に位置する常磐線沿線の中核都市に構える清陵より古い歴史を持つ公立校。転校試験を経て、九月の新学期を迎えたはいが何やら勝手が違う。俗に言う、「Surprise」の連続。

その①社会(科)では清陵にあつた「地理」が無く、「倫理社会」と「日本史」。当時、清陵では大学受験科目に縁遠い「政治経済」と「倫理社会」は一年で堅め打ちし、文部省(当時)が定める一年での標準科目である「地

理」は二年での教科設定。しかし、この現実を知らぬは本人だけであつて清陵の教務室は未履修教科に厳正な成績記入を行い、平然と私に成績簿を持たせ送り出していたのだ。この後遺症はひどく、いまだに方位といえば東西南北ならぬ「上下左右」という笑ひ者。その②これ以上のショックは、登校に先立っての校則説明会。かの地では進学校と色塗りされていた転校先ではあるが、制服、制帽に始まり、果ては靴の種類/色、靴の種類/色まで事細かに規定。これには参った。三男坊ゆえの悲しさで、兄弟からのお古で固めた身なりに全否定の洗礼。その③体育教科(数)の驚き。清陵では体育科目は学期毎の変わりメニューでわずか三種。1学期はバレーボール。2学期はマラソン。3学期は寒い戸外を避けバスケケットボール。何の事はない、単にトラック競技をやるには余りに狭い校庭とプール等の運動施設や運動用具を整備するに必要な資力のない貧乏校だったからではないか。女子生徒は更に種目が厳選され、年中明けても暮れてもテニス。あれほど打ちこんでいた割には、彼女等から伊達公子ばりとは言わずも、プロが輩出したとの噂は聞かぬ、とは言い過ぎか。などなどSurpriseは果てしない。

関東平野に降った「唯我独尊」を地で行く私は、自らの判断基準を「常識」と疑わず、一途に「清陵気質」を気取り、その実践に乗り出した。廻りの学友に向かって曰く、「制服、制帽に始まり果ては靴:云々、まで事細かに規定する校則を、何故、君らは疑問も持たずに当然の如くに受入れているのか。学校に来ている目的は何か。こんな校則と勉強することと、どんな関係があるのか」よくも無茶なことを吹聴し、煽ったことか。「校則は生徒自らの手で作り出せる」と主張し、受験勉強そっちのけで転校早々にして生徒会長選挙に出馬。世の中にはこんな單純な人間をサポートする輩もいて、男女各一名の副会長ポストも埋まり、磐石?の備え。加えて知名度のハンディを一掃するために何を血迷ったか「前例を見ない顔写真貼付ポスター」を投入。挙句は、絞りに絞った今流で言えば「マニフェスト」の公開。多くは公約せず「制服、制帽の廃止実現」の一本槍。かくして選挙結果はクラブ活動の活性化を主張した対抗馬に圧勝。一方、当時の校長は泣く子も黙る県指導主事あがり。うがった見方をすれば、秩序を徹底させてこそ学校運営の要と疑わぬ信奉者。対する学校にも下駄で通う山猿で、転校早々のアジテータ。会長当選直後から先ず校長室に呼ばれ「君は本当に我が校のことを思い、生徒会活動をやってくれるのかい」の始末。さはさりながら学校側も生徒規律の要が制服・制帽とは根拠薄弱とみたのか、結局、公約は実現。

転校先での現在に至る多少の成果?は残すも、自分は清陵の気骨ある文化ではなく、あの時代環境の空気に影響を受けただけではないかと、清陵OBを名乗るには、一抹の不安を抱えている。

御柱の伐採に立ち会う

霧の先祖と子孫たちの祭

高橋文利 (59回 下諏訪町長)

御柱祭が近づくと諏訪は燃える。人も、地も。

諏訪地方観光連盟はすでに三種類の

大型ポスター一万枚をつくって首都圏や近畿圏にばらまいた。下社の木落しと上社の建て御柱の図はいまさら説明するまでもあるまいが、今回は見立てを終えて切り出す直前の秋宮一の柱が新緑のなかにそびえ立っている写真が新たに加えられた。さわやかに晴れ渡った五月三日、その「秋一」の伐採に参加した。

諏訪大社のお膝元下諏訪町で生まれ、清陵を卒業するまで下諏訪にいた。その後の御柱祭のすべてとはいえないが、何回かは見にきていた。だが、御柱の伐採場面に立ち会ったのは初めてだった。

御柱の曳行は諏訪も岡谷もそれぞれ

分担するが、伐採するのは伝統的に下諏訪だけだ。町内十区が伐採委員会を組織し、各々の柱を割り当てられる。

実際に作業するのは二十〜四十代の若手だが、区長やわれわれ理事者(町長、助役、収入役、教育長)も参加する。事前に「どの柱につくか」と希望を聞かれたので、一も二もなく「もちろん秋一さ」と答えておいた。秋一の伐採場所が八本の柱の中でもっとも山深く、道路から急坂を登って三十分以上上にかかることは当日初めて知った。

下社の御柱は下諏訪町東保国有林から切り出す。標高千五百メートルの山あいだ。ふだんは風と樹木のざわめきしか聞こえない静かな奥山である。そこに長い年月をかけて成長した巨木が何本もある。御柱に選定するには三年前から下調べ、仮見立て、本見立てと

いう手順を踏まなければならない。「奥山の太木、里に下りて神となる」という木遣り唄そのままに、神となる木はそれなりにエリートなのだ。さて、朝九時に神事をすませて、いよいよ伐採にとりかかる。各柱とも、前回の伐採から復活した古式を引き継ぎ、チェーンソーを使わずに斧(よき)と手引きのこぎりだけで作業をする段取りだ。本格作業に入る前に、われわれが一人三回ずつ斧を振った。これまで斧を持ったことなどないから、どつしりと根を張る巨木に三回とも思い通りに斧が入らず、伐採の難しさを体験した。

秋一は目通り周囲三・三四メートル



伐採直前の「秋宮一」の前で

で、近年では最大の大きさというふれこみだ。四人一組の班が何度か交代しながら、刃渡り約九十センチの両びきのこぎりを操るのだが、幹が硬かったせいもあり、抜倒するまでに約三時間もかかった。

この間、山あいに木遣りがこだまし、雰囲気盛り上げる。かつては観衆も一杯やりながら見ていたそうだが、近年酒はご法度。何よりも安全が第一というわけである。

慎重で正確な作業が繰り返されたあと、伐採委員長が笛が鳴った。ここで

子孫に自然環境を残すために

21世紀の森林と人間のあるべき姿

小池正雄 (70回 信州大学教授)

地球環境との共生へ

現在は、我々人類にとっての段階としての二〇世紀に別れを告げ自然環境と共生して持続的発展を成し遂げてゆく二一世紀に入っている。二〇世紀は

我々人類にとって戦争の世紀、科学技術の発展の世紀とも言えたが、我々が地球環境と共生して発展していくという視点が欠如しており、ただ闇雲に我武者羅に突っ走っていた時代であった。その展開の結果齎される負の遺産

「杣山祭(そまやまい)」だ。長い年月をかけて生き続けてきた巨木に敬意を表し、抜倒直前に行う神事だが、実は一九六一年以来、四十二年ぶりに復活したのだという。古式の伝承にこだわった委員たちが、古い資料や年配者の記憶などから再現したものだ。ご神木となる用材に手を合わせたあと、巨木は大地を揺るがす轟音とともに予定通りの方向、場所に切り倒された。氏子たちの歓声がどっと上がった。

南信森林管理署によると、秋一は全長二十九メートル、直径一・〇メートル、樹齢百七十年とのことであった。抜倒直後に、切り倒した秋一の枝を切り取って切り株に差し、次世代の御柱となる木々の成長を祈る儀式も行われた。

古代からの巨木信仰はほかの土地でも受け継がれているが、とりわけ諏訪の「霧の子孫」たちにとっては格別に意義深いものであることを改めて実感した日であった。

2003東京清陵会第14号特集

われら
霧の子孫たち

平成16年 諏訪大社式年 造営御柱大祭日程

山出し祭

上社	4月2日(金)
	3日(土)
	4日(日)
下社	4月9日(金)
	10日(土)
	11日(日)

里曳き祭

上社	5月2日(日)
	3日(祝)
	4日(祝)
下社	5月8日(土)
	9日(日)
	10日(月)

宝殿遷座祭

上社	6月15日(火)
下社	5月7日(金)

に対する配慮はなかった。それに加えて前世紀の初頭から世界各地での紛争が頻発したが、特に前世紀の半ば以降すなわち第二次世界大戦後東西冷戦構造の枠組みが軍拡競争を招き、環境への配慮を欠いた展開の力を大きくしていた。また例えば人類のエネルギー利用を考えても、水力、火力、原子力、核融合へと至る一連の流れの中で、我々に必要なエネルギーは供給されうると考えていた。しかし前世紀の末に石油エネルギーの利用の限界が酸性雨問題に端を発し様々な公害問題を引き起こしていることに気が付き地球的規模でこの問題に取り組むべきことが認識されるに至った。また原子力エネルギーをトータルのコストで考えた場合に地球環境に対して齎す負の遺産の大きさに戦慄し、脱原子力エネルギー、自然エネルギー活用への流れがEUの先進資本主義国を中心に広がり始めている。またこの地球上に無限に存在していると考えられていた原生林からの木材生産が、熱帯林、シベリアタイガ、アマゾン、アフリカ、北米の原生林、オーストラリア、ニュージーランド等の原生林が存亡の危機に直面していることが前世紀末にようやく認識され、持続的再生産が可能な木材以外は国際市場に出回ることを禁止する森林認証制度に代表される様々な枠組みが、NGO・国際機関・各国政府等の様々な主体の取り組みによって提示される中で、国際舞台で各種の取り組みが行われてきていることは周知の事実である。

新田作品との出会い

二一世紀においては環境を無視した形で経済活動は不可能な状況が造り出されている。この動向は遅ればせながらやっと全地球的規模で根付きつつあるといえ、歓迎すべき方向である。しかしながら様々な矛盾を生み出していることもまた事実である。

我々の大先輩である新田次郎氏は『霧の子孫たち』を一九七〇年に文藝春秋から出版している。私もこの諏訪の地に生まれて物心付いた頃からずっと自然と一体となった生活を行っていたこともあり、新田氏の諸著作は総て読んでいた。現在の私の専攻分野である森林政策学を選んだ背景には幼少のころからの自然とのふれあいの原体験とまた新田次郎氏の諸著作との出会いがあったのではなからうかと思っている。我国の工業化段階の締めくくりに高度経済成長期という時代的背景の中で新田氏は、『霧の子孫たち』を文藝春秋誌上に発表した。氏は「観光公害に対する抵抗のあり方を含めて、自然と人間の因果関係のようなものを、なんらかの形で書きたいと思っていた。」彼は観光目的の有料自動車道路が延長され、彼の故郷にある霧ヶ峰が「なだらかな起伏が続く大草原が、コンクリートの道路によって分断されたのみならず、その延長路線が、旧御射山遺跡と七島八島の高層湿原地帯を通る予定だと聞かされた時には、身体が震えるほどの怒りを覚えた。なぜ貴重な自然や遺跡を破壊してまで、観光

目的の有料自動車道路をつくらねばならないのだろうか。」この鋭い問題意識の下に我国の工業化段階の最絶頂期において先見の明を持った取り組みが行われ、また名著を著すきっかけとなったのである。

森林と人間の関係は人類の工業化段階以前においては農地開発や戦乱等によって森林は減少傾向を辿ったものの、森林と人間が一体となった形で展開し、その関係は概ね順調であった。ところが工業化段階に至ると森林は木材生産一辺倒の時代に入り、また自然と人間との共生の概念よりも技術主義の概念が先行し自然・森林に対して非常に強い負の影響を与えることとなつてしまった。『霧の子孫たち』はまさにこのような時代的背景の下に生まれた作品であるといえる。

工業化段階においては多国籍の大型資本が全地球的規模を視野に入れた上で森林開発に携わる。それもそこにあるものを採取してくるすなわち原生林をただ単に伐採して木材として供給するあるいは農地開発を行うという行動様式であり、世界至るところでこのような開発が行われた。しかし前世紀末になるとこのようなあり方に関して疑問が提示され、持続的循環的資源としての木材以外は国際木材市場から締め出す運動がNGO、NPOから発信され世界的潮流となつてきている。現在は全世界に環境保護団体によるものから多国籍林業資本が独自に制定したもののまでを含めて一〇あまりの森林認証制度が存在している。それと共に世界

各国の森林政策も木材生産を主眼としたものから、森林の果たしている木材生産機能は勿論重要であるが、それ以上に森林の果たしている所謂多面的機能すなわち、文化的、教育的、国土保全的、水、空気、レクリエーション、セラピー、環境形成的等様々な諸機能を重視する政策体系が取り入れられてきている。アメリカ合衆国国有林におけるエコシステムマネージメントの採用、ドイツ連邦共和国における法正林森林管理方式から近自然的森林管理方式への転換、中国における森林法改正による森林管理政策の転換が前世紀末最後の一〇年間に相次いで行われた。

森林の多面的機能の重視へ

また我国においても一九六四年に制定された林業基本法に基づいて行われてきた木材生産を重視した政策が昨年森林・林業基本法の制定により森林の多面的機能を重視した森林・林業基本法林政へと転換された。二一世紀型森林管理方式の枠組みが提示されたのである。日本学術会議が纏めた「地球環境・人間生活に関わる農業及び森林の多面的機能の評価」(二〇〇一年一月)では、我国の森林の多面的機能の貨幣評価額は実に七〇兆二、三六八億円に達していることからみてこの政策転換の方向は正しいといえる。しかし二一世紀型森林管理を実施していくのに必要な枠組みに関しては今後試行錯誤の中で細部を詰めていかなければなるまい。例えば森林管理を実際に現場で行う枠組みが二一世紀型森林管理

組織に相応しく編成替えされなければならない。また森林の果たしている総ての諸機能を満度に発揮させていくためには、それなりの管理が必要である。

現在の我国の森林の状況は国土面積の六七%にあたる二、五五〇万haが森林であり、その内六〇%は広葉樹主体の天然林であり旧薪炭林や里山に始まり奥地天然林にまで至っており、残る四〇%千万haの杉、檜、唐松等の針葉樹が密生した森林を抜き伐り(間伐)することを必要としている。しかし日本を中心としたアジア、北米、EUという世界木材市場の三極構造の中で多国籍林業資本と多国籍コンサルタント資本が世界市場を制覇しており、我国の木材市場の八〇%以上は外材に制覇されている。国産材は価格的に太刀打ちできない状況下であり、産業としての林業は成立し得ない厳しい状況にあるわけである。

森林と人間の関係を考えていく場合には工業部門とは異なるのは当然であるが、農業部門とも異なり、百年を越えるタイムで物事を発想して行かねばならない。現在の我国の森林は今後今世紀末に至るまで目標とする林型に向けて持続的に整備を進めて行かねばならない。大面積一斉造林、大面積一斉皆伐といった農業的発想にもとづく森林管理方式から多段林、複層林を経て何時でも幼樹から大径木に至る総ての林齢の樹木までが育っている森林から必要な木材を択伐する森林管理方式へと導いていかねばならない。現在活躍している我々世代は森林と人間の関係

2003東京清陵会第14号特集

われら
霧の子孫たち

父への手紙

編集雑記的回想の記

飯島由美子(70回)



その一時期を担っているのに過ぎないのであり、世代を超えて森林管理を継続していかねばならない訳である。現在までの森林と人間の関係を見てみると、その時代時代の社会経済構造に規定された形で森林は人間の思いのままに改変されてきた。また我々人類の工業化段階の数世紀特に前世紀においては顕著にその傾向が現れた。その結果が前世紀末以降における地球環境に関わる国際的世論の盛り上がりと各種

取り組みへの着手であった。リオサミット、京都会議、昨年のヨハネスブルクの会議は我々の記憶に新しい。そして今世紀は過去の反省の上に立って、世界各国が一国の利害を捨てて、今後数世紀にわたる地球環境再生の取り組みに向けての着実な一歩を国際的な枠組みの中で記さなければならない世紀と言えよう。人間の一生は長いように感じても、その一生は自然の流れの中では交響曲の演奏の中に占めるたった

一音にしか過ぎないのではなからうか。その一音に過ぎない期間において科学技術を駆使すれば交響曲全体を破壊することも可能なものであり、そうならないためにも、また我々の子孫に素晴らしい自然環境を残していくために、我々は自己の生き方に関して将来に向けて責任を持たなければならないといえよう。

うだけで何一つしないのだけれど、久保田くん一人あるいは編集担当の水野谷くんと二人だけと言うよりはましかななんてね。だって去年の69回生の動員数はすごかったんです。でいつの間にか幹事の一人になってしまい、「女性性の座談会」は実現せず、せめて女性性の原稿が一位は欲しいからと水野谷くんに言われ……。父さん、先の見通せない奴だと苦笑いしておいでですね。

開き直るワケではないけど、先が見

父さんいかがお過ごしですか？ 相談に乗ってほしくてペンをとりました。実は東京清陵会会報の原稿を書くよう頼まれたのですが、御存じの通りそのような才はないし目立つのはいやだし……。どうしようかと困っています。

なぜ柄にもないことを頼まれたかと

言いますとね、今年は諏訪清陵高校同窓会の幹事を我々70回生がする事になっていて、その支部である東京清陵会も同様なんです。同期会はともかく同窓会は大学でも出席した事のない私がなぜ高校の同窓会に関与しているのかと言いますとね、話は遡るのですが、父さんが旅立たれた日、小学校4、6年の担任だった宮澤先生も見送りに来て下さいましたでしょ。あの時「同級会をしたいね」と話したのですが、ふがない教え子は故郷を離れている事を理由に何の動きもしなかったんですよ。実現しない内に長崎くんがそちらに行ってしまう。仮に同級会をしても彼が出席したかどうかかわらないと自分に言い聞かせたもののショックでした。久保田くんから「そろ

そろ同窓会の当番幹事が来るからその前に同期で集まるべく総会に出よう」との連絡を受けたのはそんな時でした。なぜか、出席しなくちゃ後悔すると思ってしまうのです。出席者は思ったより少なかったけど楽しかったですよ。で、去年です。「南青山会館で常任幹事会があるので、70回生はサブ幹事でもあり次回の参考にもなるから、できるだけ出席してほしい」旨の連絡があり、会場も近いので参加したら、なんと久保田くんと私の2人だけだったんです。その後も会場が神田・南青山・市ヶ谷・新小川町と職場・自宅に近い事と、仕事が終わってから遅刻してもいいとの条件で出席してきました。私が出席しても、ただ居るとい

通せないのは今に始まったわけではな

生き方、仕事にどうかかわってきたかを書かなくてはいけないのだけれど、私はおおよそ行き当たりばったりで、同窓会の幹事まがいをする事になった経緯を見ても明らかのように、校是の反対側にいると言ってもいい位。でも私なりに精一杯生きてきたし人になら指差される事はしてこなかった。「自反而縮離千萬人吾往矣」の精神は自分とは異なる他者をも認める事だろうと思うので、まっ、清陵精神が抜け落ちて

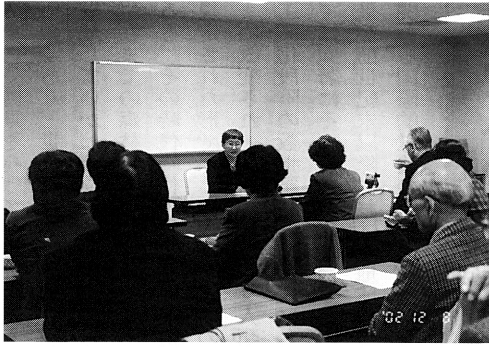
講演と音楽を楽しむ
午後のひととき

— 第九回「女性の集い」のご案内 —

「女性の集い」は、一九九五年、母校一〇〇周年を記念して第一回を開催し、都合のつく方が子供連れで集まろうと、手探りで始まりとなりました。

第二回から第七回までは主に親睦会として取り組まれてきました。食事をとりながら自己紹介や、お互いの近況報告をする中で、子供の教育に関すること、これからの生き方等が話題となりました。他の方のお話や自分の悩みを話すことで、明日からまた頑張ろうと、元気づけられる場となってきました。

第八回は、ミニ講演会を開催しました。五六回生で、清陵での初めての女性入学者のお一人であった、眼科医の青木瑞枝様をお迎えし、「いつまでも元気で」をテーマに、これからの生き



昨年の「女性の集い」で講演する青木瑞枝さん

方についてお話をしていただきました。

さて、第九回東京清陵会「女性の集い」は、「講演と音楽を楽しむ午後のひととき」として、以下の内容を予定しています。

一、心理カウンセラー・内田良子さん（六四回生）のお話「不登校とひきこもり」

一、今井紀子さん（七一回生）のピアノ演奏 シューマン「子供の情景」より

一、懇親会（ささやかな立食ワインパーティー）

今回の集いは、女性に限らず、男性の方々に多数ご参加いただきましたと思っています。

日時：二〇〇三年十一月二十九日（土）
午後一時～四時

場所：「アコスタジオ」

渋谷区神宮前一・三二二七

Tel 〇三三四〇八四五四一

JR原宿駅竹下口より徒歩二分

会費：三、〇〇〇円

定員：五〇人

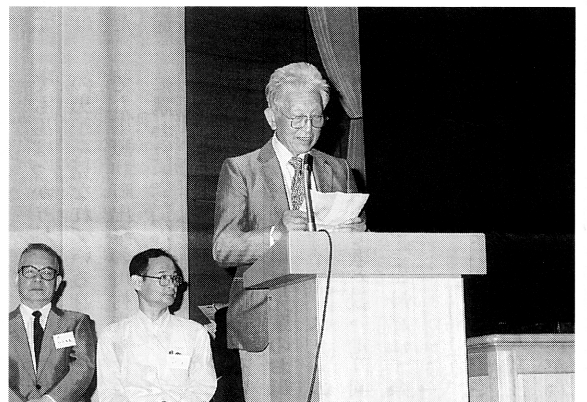
（第九回幹事71回生代表 三橋ひさ子
今井紀子 森さと子）

都立小石川高校（府立五中）

「創立85周年記念紫友同窓会」

見聞記

去る五月二十五日小石川高校同窓会（林豊会長）に、清陵から矢崎秀彦、林尚孝、小川勝嗣、春山明哲の各氏と私が招かれた。一昨年の『伊藤長七特



小石川高校 85 周年記念同窓会でスピーチする矢崎秀彦氏

集」のご縁で春山君と私が伊藤家資料の発掘整理を開始、そこに小石川高校同窓会の粕谷一希、寺門克前正副会長や柴田知彦代表幹事らが加わって、その成果が同校同窓会テーマ「私の五中・小石川さがし」に実を結んだのだ。

笑顔の伊藤初代校長（ポスター）に迎えられた会場では、創立当時の写真や資料、各界で活躍する同窓生の横顔、NGO活動などの紹介と関連書籍販売などが行われていたが、ハイライトは「小石川賞」授賞式であった。

新たに目の目をみた創立時資料を公開された伊藤家に「感謝状」、「寒水伊藤長七伝」著者矢崎秀彦氏に「特別功労賞」が贈られ、「立志・開拓・創作」の各賞が、根本二郎（元日経連会長・藤塚万里子（戦争被害被災者救護活動）、岡野俊一郎（日本サッカー

連盟名誉会長）・小山知泰（母校体育指導、栄久庵憲司（工業デザイン）・木下一彦（分子生物学確立）の各氏に授与された。また建学精神の継承者として眞田幸男元校長と菅沢現校長が「伊藤長七賞」を受賞した。

「五中・小石川生にDNAとして伝えられ、困難な時代にあっても通奏低音のようにいつも行く手を照らしてくれたものは、伊藤校長が掲げた『立志・開拓・創作』の精神である」と語った根本氏をはじめ受賞者の個性溢れるスピーチに千二百余の同窓生は惜しい拍手をおくった。

伊藤博子さん（長七の孫）と同窓生加藤剛氏が「我らは伊藤長七の教え子だった」と語る記念CDは「伝統継承」に力を発揮することだろう。

運営面では会務報告省略、女性の活躍、マクロ解体などが印象的で、同窓

生バンド「リトルストーンズ」による演奏と岩崎恭子フラメンコダンサーズが懇親会に花を添えた。

五期生松本一雄氏（九二歳）は観潮楼で巻煙草をくわえた文豪鷗外の想い出話を披露されたが、同校界隈は露伴・漱石・一葉など近代文学揺籃の地でもある。藤村ゆかりの神津康雄氏（日本寮歌振興会）も出席され、日比谷公会堂での「東京校歌祭」では、長七を通じて赤い糸で結ばれていた両校校歌を歌おうという話も持ち上がっている。

五年ぶりの総会ではながら「伊藤長七デー」の趣で、彼の蒔いた種がしっかりと根付き、大輪の花を咲かせていることを確認する一日となった。

長七が五中創設にあたり全国から人材を集めようとした中に、岩崎民平・梁田貞等と並んで小林正治（伊那富）の名前があったことが気になった。若き日の父であらうかと……。

ヒューマニズムとリベラリズム尊重の同校は平成十八年から中高一貫校になるといふ。これを機に両校の交流が活発になることを願っている。

（小林盛男 68回）

50周年を迎えた

56回生の「かりん会」

私たち五六回生が、清陵高校を卒業して五十年——半世紀が経った。長い道のりを歩んで、この五月十七日、諏訪市の「ぬのはん」で同年会「かりん会」が開催された。

学年幹事の神山幸雄君を中心に、各クラス幹事の尽力により六十余名が集った。恒例によりホテルの庭で全員揃って記念撮影。穏やかな初夏、暮れなずむ諏訪湖面が白く光っていた。物語者を悼んで黙禱の後、神山君から九部の担任であられた守矢先生が亡くなられたこと、五年毎の開催では間が空きすぎるので今回から三年毎に開催するなどの挨拶があつて、懇親会に移った。クラスの枠を超え談笑の輪が広がって、いつ果てるとも知れないほどの盛り上がりであった。八時半、名残りを惜しみつつ、校歌を斉唱後、それぞれのクラス会へと散っていった。

オンボロ校舎が原点

「かりん会」を機に、当時を振りかえってみる。

昭和二十五年四月、五六回生入学。誰彼の区別なしに「兵どもが夢のあと」の荒れた校舎の記憶が一番鮮烈であったことに違いない。入学して最初の行事が格子の壊れた窓枠にタコ糸を張り障子を貼ることであった。いつ頃から硝子に変わったか定かではないが、しばらくは障子窓で教室が暗かったことを覚えている。

私たちは、国民学校入学の第一期生であり、その最後の卒業生だった。さらに新制中学校の第一期の入学生であり、戦中戦後のめまぐるしく変わる制度の中で、話題になった世代であった。十四名の女生徒とともに清陵高校の門をくぐったのは三百余名。

地元出身者、疎開したまま住みついた者、父親の軍需工場への転勤などに



50周年の同年会に集った「かりん会」の面々

など日本の将来を決定付ける諸事件が相次いだ。この間インフレは猛威をふるい、とどまるところを知らなかった。

テレビ放映はまだなく、情報源は新聞とラジオだけ、夏休みに帰郷した先輩による情報は新鮮でおおいに刺激になった。

社会の混乱と不安の中、金もなく、情報も少なく、十分なものはい一つなかったが、清水ヶ丘の青春は、自由で、のびのびと楽しく、良い仲間があふれていた。

清陵高校時代を目を閉じて振りかえると、障子貼りの教室と、講堂に通じる傾いた石段と、校庭の大石と、多様な環境で育った個性的な仲間の顔が浮かびあがってくる。

これらは、卒業以降の思考や行動の原点になって我々が人生に大きな影響を与えたように思う。五十年を経過してそのことを深く知った。

「かりん会」が仲間のいる限り続くことを願って一句紹介しよう。岩波茂雄とともに岩波書店を築き上げた小林勇の随筆に、幸田露伴に茶掛けとしてもらった句の話がある。

「猶這箇の有るあり残る暑さ哉」

露伴がこの句を作ったのは太平洋戦争の最中で「老残の身にもかくの如き灼いものがある」という意味だと書いている。

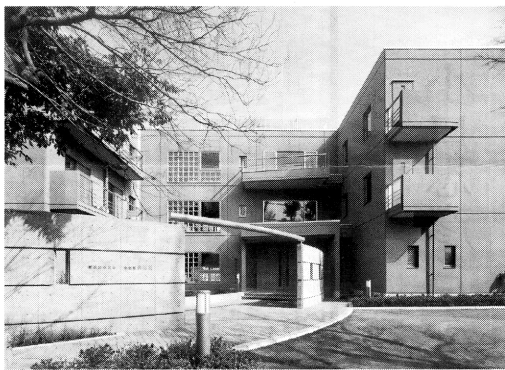
いま、七十歳を目前に私たち五六回生「かりん会」の中にも、人生にひた

と対峙し、このような思いを抱いている友をみた。ただ懐かしいだけでなく、顔に刻まれた深いしわの中にそれぞれの老年の覚悟を感じさせるものがあった。(山崎若雄 56回)

学生寮「長善館」が調布市に完成

新築が進められていた財団法人諏訪郷友会(小口楨三理事長)の学生寮「長善館」が四月に完成して、四〇人の館生自治の共同生活がはじまった。

長善館は上京して勉学に励む諏訪出身者のために明治二四年、諏訪高島藩校の名を継承して諏訪青年会(現在の諏訪郷友会)が東京本郷に創設、以後一一〇年余にわたり諏訪地区の文化事業として受け継がれてきたが、巢鴨、調布市仙川と移転し、調布の二棟とも建築後四〇年を経たため改築計画が出ていた。



新「長善館」全景

館生はその後全県出身者が対象となつて卒館生は一、六〇〇人にのぼり、七割は諏訪中・清陵卒業生となっている。

新長善館は敷地面積二、三〇〇㎡、建築面積五三〇㎡の鉄筋コンクリート造り三階建て、延べ床面積一、二六〇㎡。男子個室四〇室は机、書棚、収納ラック、ベッド付きで、全室冷暖房、通信回線を備えている。共用施設は食堂、会議室、談話室、和室に宿泊室二室もある。建築費は二億五千万円で、諏訪六市町村からの一、〇〇〇万円をはじめ、会員、法人、篤志家からの募金が行われている。

場所は武蔵野の雑木林に囲まれた調布市の文教地区で桐朋学園、都立神代高に隣接し、最寄りの京王線仙川駅(五分)からは新宿へ二五分、渋谷へ三〇分と各大学への通学には便利になっている。

館費は毎月五万五千円(夕食代を含む)で、毎年約一〇人を募集する予定。(中谷範行 62回)

南信同窓連、東京同窓連の活動状況について

昨年六月、南信同窓連(南信地区高校同窓会東京連合会)会長就任と連動して東京同窓連(長野県高校同窓会東京連合会)副会長となり、会報一三号で「南信同窓連会長就任にあたって」と題して南信同窓連と東京同窓連についての紹介を行った。

東京清陵会は、同窓連の活動に対し

積極的に参画せず、どのような活動が行われているのかはつきり分からなかった。一年間執行部の一員として活動に参加し、その実態がかなりはつきり理解できたので、簡単に紹介したい。

それぞれの動きを、項目だけ示したが、かなり頻繁に会合があり、真面目に討議を重ねている。ご覧のように、五月の中旬などは一週間に東京同窓連と南信同窓連の会議が三回もあった。

残念なことに、南信同窓連の活動も

東京同窓連の活動も、構成母体である各高校同窓会東京支部の構成員には、ほとんど伝わっていない。活動どころかその存在すら知られていないといつてよい。時間をかけて編集した東京同窓連会報なども各地区宛四〇〇部の配布に終わっており、各校には二〇部ほどしか配布されない。役員以外に配布することはできない。東京同窓連理事会の席上で、新理事の方から、これまでの東京同窓連の活動についてまったく知らされていないという声が出たほどである。いわば、理事だけの活動に終わっているといってもよい。

もっとも、南信同窓連の総会、旅行会、忘年会、新年会、ゴルフ会には多数の参加があり、決して役員だけの集まりではない。南信同窓連の旅行会などは大変楽しいものである。昨年の例では阿南高校OBから「漕艇部設立にあたり清陵端艇部の指導を受けた」の是非会いたいと声をかけられた。また、昨春のゴルフ会では急逝された中澤澄行副会長が優勝し、秋のゴルフ会を企画された。急逝にともない、秋の

ゴルフ会は「中澤澄行氏追悼ゴルフ会」として行われた。何回か出席すると、顔なじみも出来て楽しくなることは確かである。南信同窓連の活動は、四地区の中でもっとも活発で、これらの会合のほとんど全てに依田八治顧問（北佐久農）は出席されている。明治三十八年生まれで北信地区所属の依田顧問は、今年九十八歳という高齢にもかかわらず、南信同窓連の会合に参加することを楽しみにしておられる。

とはいえ、南信同窓連のばあい、横内澄雄事務局長（岡谷南）を始め、大塚紀年副事務局長（伊那北）、伊澤ちはる副事務局長（伊那弥生ヶ丘）、富田晶子副事務局長（赤穂）などの皆さんが十年以上縁の下で力持ちとしてご尽力頂いていることで、何とか活発な活動が継続しているといえる。このような事情を是非知って欲しいと願い、両同窓連の活動を紹介した。

加盟校それぞれの活動に触れる機会も多いので、今後の東京清陵会活動の参考にさせて貰うつもりである。

南信同窓連の動き

二〇〇二年

四・一三 第二五回ゴルフ会 七

校二二名 中澤澄行氏

（諏訪清陵）優勝

五・一四 常任理事会 八校八名

五・二〇 理事会 一三校一八名

六・一五 平成一四年度総会 一

八校六三名

七・一一 幹事会 一三名
九・二七〜二八 第一五回旅行会
一四校六三名
一〇・二六 第二六回ゴルフ会
一一・一一 忘年会 一八校六一名
二〇〇三年

一・一六 新年会 一八校六一名
四・一二 第二七回親睦ゴルフ会
九校一八名

五・一三 常任理事会・理事会
一八名
六・二二 平成一五年度総会 一
七校六一名

一一・一二 第二八回親睦ゴルフ会
一一・二一〜二二 親睦旅行会
一一・二一 忘年会 新宿レガル

二〇〇四年

一・一五 新年会 新宿レガル

東京同窓連の動き

二〇〇二年

六月 五日 正副会長会

六月 五日 常任理事会

六月 一〇日 理事会

七月 六日 第三十八回総会 五
四校二〇一名

七月 三〇日 新旧役員引継会

九月 三日 正副会長会

一一月 二日 正副会長会

一一月 一六日 理事会

一二月 二〇日 参与会

二〇〇三年

二月 一日 新年会 五六校二三
三名

二月 二六日 正副会長会 一〇名
三月 二五日 第一回編集会議
三月 二九日 第五回親睦ゴルフ会
三十一名（北信三名、東信四名、中信一六名、南信八名）
六月 一三日 創立四十周年記念行事実行委員会 二四
七月 五日 第三十九回総会 五
三校二〇八名
二〇〇四年
二月 七日 新年会（創立四〇周年記念式典）
五月 一四日 常任理事会 二六名
五月 一九日 理事会 四二名
（林尚孝 52回）

小口忠彦さんを悼む

小平 祐（四二回）

小口忠彦さんが二〇〇二年八月、不

れた。

婦の客となった。十二月「小口忠彦先生を偲ぶ会」が茗溪会館で開かれ、諏訪からも同窓生が参列。一四〇名余が献花した。遺影には清陵同窓会旗が添えられ、会場には「東に高き」の鎮魂歌が流れる。荘厳な「偲ぶ会」だった。

小口忠彦さんは一九一七年六月、下諏訪に生誕。一九三五年三月、諏訪中学卒業。一九四五年九月、東京大学文学部心理学科卒業。その後東京第二師範学校、東京学芸大学講師、お茶の水女子大学教授、名誉教授、放送大学教授等を歴任された。

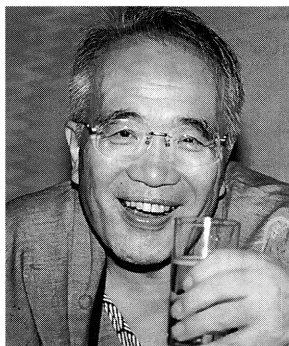
小口忠彦さんの学界への貢献は大きい。「学習の心理」「創造力の心理」他専門書で五〇冊余、受験生向けのロングセラーもあり、訳書共著など枚挙に暇ない。学者として立派な業績を残さ

小口忠彦さんの故郷を愛する心は深かった。一九八八年、諏訪湖畔の「小口太郎顕彰碑」建立には、実行委員会副会長、事業委員長として活躍、事業を見事に立ち上げた。また一九八九年、南信日日新聞（現長野日報）に「ふるさとの心理学」を十回にわたって連載。「独りにこだわたりたがる」「先生がよく似合う」「湖水ばた」「湖水の全面結氷」「諏訪の明神様」「人を見るなら御柱」「問題をかきつける力」「ユ一モアを生かす力」「島木赤彦」「小口太郎」などの表題で、心理学の立場から故郷諏訪を解明している。優しい深い言葉は、学問とロマンは同根である事を教えてもいる。

小口忠彦さんは清陵三六回生。八十五歳の大往生だった。

畏友中澤澄行兄を偲ぶ

林 善八郎 (五八回 ひかり味噌会長)



毎年旧盆の八月十四日は58回生にとって、待つこと久しい山行の日です。師友互いに胡座をかいて、談論風発、旧交をあたため来年の再会を約して別れを惜しむのです。今年の山行会は悲しくも亡き君の冥福を祈る新盆になってしまいました。

同級生全員のアルバムに忘れ得ない一枚の写真があります。母校の古い体育館の土手に聳える、諏中の歴史を語り伝えてきた桜の巨木に若鷺が群がっているかのような写真です。担任の矢嶋壽雄先生が自慢のカメラで撮ったもので、巨木の高さに登っている君はこの頃から既に高い理想に燃えていることを窺わせるに十分であり、「Boys be ambitious」を最後まで貫いて生きてきた君の心の原点がここに映されています。

野球のわが下諏訪中の宿敵、上諏訪中の強肩猛打の名捕手の君と同級生に

なつて、深い友情を得たことは共に食品業界に生きる私に大きな力を与えてくれました。スポーツ万般に秀でていた君ですが、特にボートや柔道では輝く優勝杯を幾度か勝ち取り趣味のゴルフは滅法強かった。憧れの水産大学を卒業して食品業界の名門企業キューピーに就職され、創業者の中島董一郎翁からは全幅の信頼を得て、部下同僚からの人望を一身に集め、同年生仲間では最も早く一部上場企業の役員になり、私には豊かなキューピー人脈を紹介してくれました。

思い出すのは「日本の鰻の需要はうなぎ登り、養殖のできない鰻はいずれ供給不足になる」と言つて、ナマズの宝庫アマゾンにまでくり出し、ついでに寄つたリオのカーニバルでは夜を徹して飲み踊り青春を満喫してきたという羨ましい土産話。

商品開発や販路の新規開拓や経営観は気宇壮大な先見性とロマンに富み、リタイアされて創業した会社「W and A」の創業の理念にそれは明白です。

自由を得て、君は東京清陵会の副会長として、持ち前の積極的な行動力を發揮し、会の運営に情熱を燃やし、帰郷した折には、東京清陵会の勉強会やゴルフ会の話を私たちによく語ってくれました。特に、人名録の編纂には文字通り命を燃やしての全力傾注でした。いみじくも人名録に引用されている中島董一郎翁の言葉を今読む時、「朝の紅顔、夕べの白骨」の経文が浮かび、虫の知らせか、無常なるかな、己の寿を悟っておられたかのように思



入学時の写真。前列中央矢嶋先生、その右林善八郎氏、木の上一番右が中澤氏。

われてなりません。生涯を通じての深い友情と幾多の思い出のシーンを回想しながら、語り尽くせない拙文を悔やみ、ご冥福を祈って追悼文といたします。

追悼 阿木翁助先生

片野 満 (五六回)



た。そして別れを惜しむ会葬者は優に二百名を越えていた。行年九〇。

一九八九年正月、私は阿木さんと当時の南信日日新聞(現長野日報)で対談する機会を得た。席上、単身上京してプロレタリア作家を夢見た少年時代、負け惜しみ瘦せ我慢人生、信州人氣質の話と、私を相手に信州人であることの誇り、熱い故郷への思いのたけを縦横無尽に語った。軽妙洒脱な阿木さん独特の語り口はそれから五年後、清陵百周年記念ビデオ「清水ヶ丘にうたう」で取材した、同窓生インタビューの席上でも健在だった。当時八十歳、滔々と自らの人生を語り、故郷を懐かしみ、その豊かな人生経験から生まれ出る、当意即妙、天衣無縫な話術は、まさにインタビューの圧巻だった。

その後も同窓会に、学生寮長善館の記念祭に足を運んで、ユーモアたっぷりの阿木節を聞かせて下さった。しかし、その阿木さんは、もう……。こよなく酒を愛し、故郷への熱い想いを寄せ続けた熱血漢、大先輩阿木さんの霊に、改めて感謝と追慕の情を捧げる次第である。

阿木翁助著「青春は築地小劇場からはじまった」―自伝的日本演劇前史―と添書のあるこの本は、青春から壮年にわたる阿木さん(本名 安達鉄翁)の生き様を描いて、人間味溢れるばかりの名著である。「新劇からはじめての好事、映画、ラジオ、テレビでの仕事と、あらゆる「種目」に出場して来た。こんなに渡り歩いた者はほかにいないだろう」とご自身が述懐されている通り、作家としての阿木さんの足跡は実に多岐にわたっている。

その思いを新たにしたのは、昨年九月十七日の葬儀の席上だった。捧げられた花輪の数は百二十、新派から新国劇、各テレビ局、新橋演舞場などの劇場、森繁久弥、坂東玉三郎、水谷八重子、黒柳徹子、熊倉一雄、大山のぶ代など、錚々たる人々の名が並んでいる。

二〇〇二年度 東京清陵会定期総会報告

平林千春 (69回)

▼伝統をどう継承するか

年々若い世代の同窓会への参加率が減少していく中で、諏訪中学―諏訪清陵高校の伝統を再確認し、次代へ伝えていくために何が出来るか―六九回生が幹事学年を務めた二〇〇二年の第三六回東京清陵会は、「伝統の継承と発展」をテーマとして、十月十八日市ヶ谷アルカディアで開かれた。

本総会では二〇〇二年七月六日に、諏訪清陵高校にて開催された『雲立ち迷う時代を生きる』と題された「在校生・同窓生交流会二〇〇二」の記録として、ビデオ上映、写真展示、記録集の頒布が行なわれた。

同交流会は第一三三号の「東京清陵会だより」に詳しく紹介されているのでここでは省略するが、東京清陵会(有志)の呼びかけで実現した初の交流会だけに、その意味を確認し、現状の諏訪清陵高校の姿を知ってもらうために



も、第三六回総会のメインテーマとして提示された。

また懇親会席上の余興としては、清陵クイズ研究会の出題による「清陵クイズ」が実施された。過去から現在の清陵についての難問・奇問が勝抜き方式で出題され、会場に集まった中高年同窓生諸氏の頭を悩ませた。

総会は一年に一回同窓生が集まり、懇親を深める場であるとともに、清陵を軸として、過去と現在を結ぶ糸であり、その象徴として「清陵の現在」についての問題提起として、これらの企画は意味があったと思われる。

▼未来へ紡ぐ清陵の精神を

第三六回総会は、まず幹事当番年の八巻和彦君(六九回)の力強い開会挨拶で幕を開け、この一年間に物故した同窓生への黙禱の後、林尚孝会長(五二回)が「同窓の絆を強めよう」と挨拶した。続いて来賓として、宮坂久臣同窓会会長、窪田孝美校長(当時)の挨拶を受けた。

ついで東京清陵会の総会議事に入り、「人名録二〇〇一」の販売状況についての報告、二〇〇一年度会務報告及び収支決算報告、同監査報告、二〇〇二年度事業計画及び収支予算の報告が行なわれた。さらに今期の特別議題として、東京清陵会の会計が逼迫している現状を受け、会費値上げ(年会費一〇〇〇円、三年まとめて徴収)が事務局より提起され、万場一致で承認さ

れた。併せて役員改選も報告され、新役員全員が承認された。また功労者表彰として、長年会計を務めてきた河合三彦氏(六六回)が特別表彰された。

懇親会は、名川方敏(三六回)、牛山孝(五九回)河合三彦(六六回)清水訓夫(六九回)村上志保(一〇三回)の各氏によって鏡割の後、小平祐氏(四二回)の乾杯発声によって始まった。同時に、LCV協力の下制作された「在校生・同窓生交流会二〇〇二」の記録ビデオが放映され、途中、「清陵クイズ」が万場を賑わせた。

最後に宮下安彦君(六九回)を初めとして壇上に六九回生七〇人が登り、第一校歌「東に高き」と第二校歌「あま博浪の」の全十八番の斉唱によってファイナレを迎え、次期当番幹事の久

二〇〇三年度 同窓会本部定期総会報告

矢崎勝美 (70回)

「校歌誕生一〇〇周年、伊藤長七の遺徳を偲び、『雖千萬人吾往矣』の今尚新しきを知る」

本部の定期総会・講演会、懇親会が、例年通り盛大に開催された。

六月二十八日(土) 諏訪湖畔の「紅や」を会場とし、梅雨時にも関わらず天候にも恵まれ、三百名以上のご参加をいただき極めて盛り上がった。当番幹事の七〇回生をはじめ関係者のご努力・ご協力に敬意を表したい。

総会においては、役員・事務局(武居浩明先生)から健全なる会務・財政状況が報告され承認されたが、特に「創立一一〇周年記念としての会員名

保田功一君(七〇回)の閉会の挨拶で幕を閉じた。

第三六回総会は無事終了し、我々六九回生の役務は終わったが、六月二十九日の同窓会本部総会、七月六日の在校生との交流会、そして十月十八日の東京清陵会総会と六九回生全員が集結し、運営に当たった。延べ十数回の打合せを重ねながら、円滑に全てが行なわれたことに、改めて謝意を表したい。

とにかく学年幹事としては、「激動の一年」であったが、交流会、総会とも成功裏に終了したことに安堵している。この歩みを将来につなげ、二一世紀に清陵精神がより一層強く咲くことを切に願うものである。

矢崎勝美 (70回)

「簿発刊事業」と「母校SSH事業への援助」が提案され、これも異議無く推進の意志統一がなされた。名簿整備については、価値観の多様化やプライバシー保護の重視される時代にあつて、担当する委員会も苦勞が多い中でご奮闘されており、先に立派な名簿を刊行された東京清陵会の諸兄には、ご指導ご援助をお願いする次第である。

特別企画として「寒水伊藤長七先生と雖千萬人吾往矣」と題打った矢崎秀彦先生(三五回生)のご講演を戴いた。九十近い高齢とは信じ難い矍鑠として精力的なお話は、我々をいつのまにか「雖千萬人吾往矣」の世界に連れ込み、現場に根差した活動主義教育と今に通じる国際的視野を説いた長七先生の偉大さを抵抗無く納得させてしまった。「私は総会の常連ではないが、長七先生の話はどうしてもお聞きしたかった。」と足を運んでくださった先輩諸兄が目立った事で、企画担当は笑顔満面であった。



このところの懇親会は、老若入り乱れての大騒ぎ(失礼)になる傾向が強くなり、今年も司会泣かせの盛り上がりを見せた。「総会に間に合わずとも懇親会には」という方も少なくなく、この日に合わせ年次顔合わせ会を企画している学年も幾つか見受けられた。

恒例となった締めくくりの校歌大合唱は、正に校歌百歳の誕生祝いであり、参加者それぞれの青春を回顧する、そして今の自分を「雖千萬人吾往矣」に照らしながらの、うねりとハートモニーとなって湖面にこだましていた。来年の総会での再会を期して。

別表1 年次別会員数と会費納入結果 (7月17日現在)

回	現員	不明	計(費)	回	現員	不明	計(費)	回	現員	不明	計(費)
21	0	1	1(一)	48	74	3	77(34)	77	55	18	73(24)
22	1	0	1(一)	49	108	3	111(57)	78	46	37	83(13)
23	0	1	1(一)	50	92	7	99(51)	79	42	25	67(16)
24	1	1	2(一)	51	107	5	112(67)	80	28	23	51(7)
25	4	1	5(一)	52	120	2	122(87)	81	37	17	54(10)
26	3	2	5(一)	55	31	0	31(19)	82	28	26	54(10)
27	5	0	5(一)	56	116	8	124(75)	83	41	49	90(10)
28	9	2	11(一)	57	121	5	126(80)	84	32	26	58(8)
29	0	2	2(一)	58	113	3	116(74)	85	38	37	75(13)
30	6	2	8(一)	59	109	7	116(61)	86	31	23	54(9)
31	11	2	13(一)	60	118	10	128(76)	87	25	18	43(2)
32	10	4	14(一)	61	108	9	117(66)	88	19	31	50(5)
33	9	4	13(一)	62	108	11	119(59)	89	17	37	54(5)
34	15	1	16(一)	63	116	12	128(73)	90	12	29	41(1)
35	25	1	26(一)	64	92	6	98(60)	91	12	27	39(1)
36	17	4	21(一)	65	90	4	94(44)	92	28	25	53(5)
37	15	2	17(一)	66	91	8	99(43)	93	10	13	23(1)
38	26	0	26(一)	67	106	10	116(42)	94	5	8	13(0)
39	31	1	32(一)	68	90	10	100(44)	95	4	7	11(0)
40	25	1	26(一)	69	110	9	119(50)	96	11	10	21(1)
41	47	2	49(一)	70	101	11	112(39)	97	2	3	5(1)
42	43	2	45(一)	71	76	14	90(24)	98	5	4	9(1)
43	54	1	55(一)	72	63	7	70(20)	99	1	0	1(0)
44	53	2	55(一)	73	66	10	76(24)	100	4	0	4(1)
45	55	2	57(一)	74	75	21	96(29)	101	1	0	1(0)
46	67	3	70(一)	75	48	18	66(15)	計	3,630	767	(1,520)
47	69	2	71(37)	76	44	15	59(15)				

- 注 1) 現員：東京清陵会に登録されている会員で、所在不明者を除く
 2) 不明：以前東京清陵会に所属していた現在所在不明のもの
 3) () 内は今会計期(2002.4～) 会費完納者及び前納者の人数、75歳以上(46回以前)の会員は会費免除
 4) 会費納入者数1,520名と今期納入者数の差は終身会費納入その他による
 5) 終身会費納入者総数1,222名(内51名死去、28名所在不明)

別表2 年度別会費納入額および納入者数

前々期納入額総計(1992.4～1997.3)	10,936,585円；2,079名
内 訳	
1992年4月～	小計 4,351,185円 (1,021名)
1993年4月～	小計 2,090,400円 (353名)
1994年4月～	小計 1,428,800円 (236名)
1995年4月～	小計 1,855,600円 (289名)
1996年4月～	小計 1,210,600円 (180名)
前期納入額総計(1997.4～2002.3)	7,499,200円；1,371名
内 訳	
1997年4月～	小計 3,577,200円 (734名)
1998年4月～	小計 1,620,800円 (272名)
1999年4月～	小計 862,800円 (129名)
2000年4月～	小計 434,000円 (69名)
2001年4月～	小計 1,004,400円 (167名)
今期納入額総計(2002.4～2005.3)	960,200円；317名
内 訳	
2002年4月～	小計 951,200円 (314名)
2003年4月～	小計 9,000円 (3名)

2002年度収支決算報告(案)

自2002年4月1日至2003年3月31日 (単位：円)

支出の部		収入の部	
科 目	金 額	科 目	金 額
総会費用	1,896,253	総会会費	1,936,000
会議費	175,189	会員年会費	961,200
諸会費	9,000	寄付金	68,000
通信費	939,290	受取利息	1,901
印刷費	320,959	前期繰越	10,266,836
事務雑費	374,390		
会報費	566,975		
次期繰越	8,951,881		
合 計	13,233,937	合 計	13,233,937

2003年度収支予算(案)

自2003年4月1日至2004年3月31日 (単位：円)

支出の部		収入の部	
科 目	金 額	科 目	金 額
総会費用	1,800,000	総会会費	2,000,000
会議費	150,000	会員年会費	1,000,000
諸会費	30,000	寄付金	50,000
通信費	950,000	受取利息	5,000
印刷費	300,000	前期繰越	8,951,881
事務雑費	350,000		
会報費	700,000		
予備費	50,000		
次期繰越	7,676,881		
合 計	12,006,881	合 計	12,006,881

(注) 2003年度予算の収支差額は1,275,000円不足

東京清陵会の現況

データベースから東京清陵会の現況をみると次のとおりである(二〇〇三・七・二五現在)。

一、東京清陵会会員の定義

(1)首都圏(東京、神奈川、埼玉、千葉、群馬、栃木、茨城)在住の同窓生(ただし、退会申出者を除く)。

(2)転居して首都圏を離れたが支部会費を納入している同窓生。

二、会員現勢・総数三、六三〇名(住所不明者七六七名を除く)

(1)都県別会員数

東京都一、七三八名、神奈川県七三五名、千葉県四五〇名、埼玉県四三五

名、茨城県七六名、群馬県二六名、栃木県二二名、その他一四八名

(2)年次別会員数(別表1)

三、会費納入状況(二〇〇二・四・二〇〇五・三会計期)

(1)納入者総数 一、五二〇名

(2)年次別会費納入者数(別表1)

(3)年度別納入額及び人数(別表2)

四、危機的な財政状況

別表2に明らかのように、納入者・納入金額がともに前会計期に比べ激減の傾向にある。別表3に示したように、九年間で会員数は約一四％減少し、所在不明者は四倍弱に増加している。財政状況の悪化にともない次期繰越金は、九百万円を割り込んだ。一九

九八年の繰越金一六三三万円と二〇〇三年の繰越金八九五万円から見ても、年間約一五〇万円の繰越金減少状況にある。このまま放置すれば、一六〇〇万円の繰越金がゼロになるのは数年後のことである。現在、財政問題検討委員会において対策を検討中である。財政のバランスを取るためには、活動状況を縮小するか、収入を増加させる以外に方法はない。現在の会費納入率は会費免除会員を除くと、四九％である。会費が完納されれば、当面の危機的状況は回避できる。会費未納会員のご協力を切にお願いする次第である。

会長 林 尚孝(52回)

別表3 会員数と次期繰越金の推移

年	会員数(名)	不明者数(名)	次期繰越金(円)
1994	4,227	207	16,039,236
1995	4,265	238	16,073,199
1996	4,179	267	15,962,791
1997	4,068	329	15,008,425
1998	3,944	437	16,330,130
1999	3,797	546	15,191,116
2000	3,832	485	13,660,668
2001	3,628	649	11,499,913
2002	3,768	672	10,266,836
2003	3,630	767	8,951,881

- 注 1) 次期繰越金は各年の3月現在
 2) 会員数、不明者数は各年の7月現在

二〇〇二年度 会務報告

二〇〇二年

8・24 幹事会 会務報告決算報告、事業計画予算案、役員改選、会費値上げなど 四六名出席

9・27 南信同窓連親睦旅行 六五名参加(内清陵二名)

10・17 「在校生・同窓生交流会二〇〇二」の記録・雲たち迷う時代を生きる 刊行

東京清陵会会報第一三号編集委員会

10・18 第三六回定期総会 アルカディア市ヶ谷、六九回生担当、出席者総数二四三名

10・26 南信同窓連ゴルフ会・中澤澄行氏追悼コンペ

計 報

謹んで哀悼の意を表し、ご冥福をお祈り申し上げます。(敬称略)

氏 名	年 次	逝去年月日
北野 増雄	(25回)	2002. 6.30
菊池 武男	(27回)	2002. 5.13
小松 勝治	(27回)	1999. 7.30
小尾 帋雄	(28回)	2003. 2.23
小川 豊	(29回)	2003. 6.30
三輪 弥一	(29回)	2000. 8. 3
笠原 武男	(30回)	2002. 1. 9
安達 鉄翁	(31回)	2002. 9.11
笠原 文男	(32回)	2002. 6. 8
有賀 忠義	(33回)	2002. 2.23
小飼 宗平	(33回)	2002.11. 4
溝口 克郎	(33回)	2002. 1.31
柳田 昱也	(33回)	2002. 3. 6
鮎沢 周太	(34回)	2001.10. 4
小松 和蔵	(35回)	2002. 9.18
小口 忠彦	(36回)	2002. 8. 1
小柳 統越	(36回)	1994. 6.15
中村 卓陞	(36回)	2001.10.11
尾沢 政人	(38回)	2002.11.16
小林茂三郎	(38回)	2001.10.15
牛尼 松美	(39回)	2002. 4.30
両角 清衛	(40回)	2003. 1.13
小川 忠夫	(42回)	2001.10.14
小口 泰弘	(42回)	2003. 4.19
守矢日出男	(42回)	2002. 9.24
小口 泰弘	(44回)	2002. 2.10
長田 忠雄	(45回)	2002. 2.12
松平 定陽	(45回)	2000.10.21
両角 四郎	(45回)	2002. 9. 4
福岡 芳弘	(46回)	2002. 7.26
三澤 祥貞	(46回)	2002. 3.14
宮川 公一	(46回)	1997.10.23
宮坂 吉行	(46回)	2002. 5. 8
米倉 健二	(46回)	2003. 5. 5
渡辺 慎一	(46回)	2002. 6. 4
笠井 忠雄	(47回)	2002. 7. 7
根橋 義人	(47回)	2001. 2.23
大蔵 宏	(48回)	2001.12.10
小松 正幸	(48回)	2002.12.14
矢崎 博通	(48回)	2001. 9.25
雨宮 孝	(49回)	2003. 3. 2
河西 達之	(49回)	2001. 6. 7
篠原 道明	(49回)	1998. 9.10
吉川 六朗	(49回)	2003. 5. 3
唐沢 正	(50回)	2003. 6.29
水上 龍郎	(51回)	2002. 1.28
神取 信明	(52回)	2002. 8.12
天野 鉄夫	(55回)	2002. 6. 3
柿木 篤	(56回)	2002.12.10
宮坂 武人	(56回)	2002.11.27
中澤 澄行	(58回)	2002. 9. 1
五味 武夫	(62回)	2000. 1. 3
加藤徳太郎	(66回)	2002. 9.21
山岡 秀顕	(66回)	2002. 8.22
五味 芳保	(68回)	2003. 2.22
小山 叔朗	(69回)	2003.10.14

(事務局に連絡が入った方)

- 11・9 第三回事務局会議 六名出席
11・14 東京清陵会第一三回ゴルフ同好会コンペ
12・6 第一回当番学年(七〇回)幹事会 六名出席
12・8 第八回女性のつどい、講演・青木瑞枝(五六回)、演題「いつまでも元気で」二四名参加
12・11 南信同窓連忘年会 六一名参加(内清陵三名)
二〇〇三年
1・15 南信同窓連新年会 六一名参加(内清陵三名)
1・11 第二回当番学年幹事会七〇回生 九名出席
2・1 東京同窓連新年会、五六校二三三名参加(内清陵四名)
2・14 第三回当番学年(七〇回)幹事会 七名出席
2・20 人名録制作委員会 七名出席
3・3 第五回諏訪清陵高校卒業証書授与式 林会長出席
3・14 東京清陵会だより一四号、第一回編集会議 九名出席
3・22 「二一〇周年記念会員名簿」第一回編集委員会、林会長出席
4・3 諏訪清陵高校入学式 林会長・洲上顧問出席
4・12 第二七回南信同窓連ゴルフコンペ 森元(五九回)参加
4・12 二〇〇三年度第一回事務局会議 七名出席
4・21 本部物故者慰霊法要・幹事会 東京から三名出席
4・25 当番学年(七〇)幹事会
5・13 南信同窓連常任理事会 林会長出席
5・14 東京同窓連常任理事会 林会長出席
5・19 東京同窓連理事会 林会長出席
5・25 小石川高校創立八五周年記念司紫友同窓会、清陵同窓会から五名参加
矢崎秀彦氏(三五回)に小石川賞特別功労賞
5・31 学校評議員会、(諏訪清陵会)理事会、同窓会常任幹事会、幹事会

- 林会長他出席
6・19 東京同窓連創立四〇周年記念事業実行委員会 林会長出席
6・21 南信同窓連総会 一七校六一名出席(内清陵二名)
6・28 平成一五年度諏訪清陵高校(旧制諏訪中学校)同窓会定期総会 東京清陵会から林会長他多数参加
7・5 東京同窓連総会 五三校二〇八名出席(内清陵四名)
7・9 常任幹事会 二〇名出席
二〇〇三年度 事業・行事計画(案)
一、第三七回定期総会の開催 一〇月一七日(金)アルカディア市ヶ谷七〇回生担当
二、「東京清陵会だより」第一四号の発行
三、東京清陵会「人名録二〇〇一」の販売促進
四、第九回「女性のつどい」開催 一月二十九日(土)「アコ・スタジオ」七一回生担当
五、東京清陵会ゴルフ同好会、ゴルフ

編集後記

意気込んで『霧の子孫たち』をキーワードにしたものの、果して原稿が集まるかどうか、期待と不安が半々でした。しかし、不安は杞憂に終わりました。それぞれの想いが籠った原稿が寄せられました。清陵精神の顕現である「霧の子孫たち」の「夢」と「志」が、これからも多くの後輩たちに引き継がれて行くことを願ってやみません。

(70回 水野谷真一)

東京清陵会 人 名 録

2001年版

申し込み方法:
郵便振替にてご送金ください
一週間程でお手元に届きます。

00170-8-12344

加入者名:東京清陵会人名録

B5版 444頁 頒価3,000円(送料込)



東京清陵会会員約3,750名 物故会員1,100名を収録

多くの会員から一筆コメントをお寄せいただき、「読める人名録」になっています。

東京清陵会ではほぼ10年ごとに人名録を発行してきました。

今後10年、同窓生の消息を伝える1冊として、ご活用いただけます。